

12. 虚血性心疾患に対する ^{99m}Tc SPECT の有用性 評価——PET との比較——

高橋 範雄	土田 龍郎	杉本 勝也
山本 和高	石井 靖	(福井医大・放)
藤林 靖久	脇 厚生	定藤 規弘
米倉 義晴		(同・高エネ研)
中野 顕	李 鐘大	(同・一内)

虚血性心疾患患者 8 例に対し、新しい脂肪酸代謝製剤である ^{123}I -9MPA SPECT, ^{18}F -FDG PET を施行、比較検討を行った。9MPA 投与 2 分後、および 50 分後から SPECT を撮像し、視覚的に fill-in の有無を判定した。fill-in (+) の区域では (-) の区域に比べて、空腹時における FDG 集積亢進 ($\text{SUV} > 3.5 \text{ mg/ml}$) はより高率にみられ (8/11 vs. 5/15), 本剤の洗い出しの低下が心筋 viability の指標となる可能性が示唆された。しかし、症例数が少なく、血行再建術前後における壁運動改善の有無との比較を含めた今後の検討が必要である。

13. 小児逆流腎症における ^{99m}Tc -MAG₃ ダイナミック SPECT の検討—— ^{99m}Tc -DMSA SPECT との比較を中心に——

駒井 哲之	外山 宏	古賀 佑彦
		(藤田保衛大・放)
木曾原 悟	諸岡 正史	美濃和 茂
矢崎 雄彦		(同・小児)
前田 寿登	白川 誠士	仙田 宏平
竹内 昭		(同・衛・診放技)
澤井 剛	加藤 正基	横山貴美江
		(同・病院・放部)

^{99m}Tc -MAG₃ は腎の形態と排泄機能の両方の像が静注後経時的に得られるが、腎実質を中心に集積している時間が静注後数分と短いため、ダイナミック SPECT を撮影することにより、腎実質の形態評価のその有用性について小児逆流腎症 8 症例について ^{99m}Tc -DMSA planar および SPECT と比較し、評価検討を行った。 ^{99m}Tc -DMSA に比べ 2 歳以下の低年齢児に関しては分解能が劣るものの短時間で検査でき、1 回で同時に腎の形態、排泄機能を見る検査として小児腎疾患の検査に有用であると思われた。

14. ^{99m}Tc -GSA を用いた肝受容体イメージングにおける簡便な指標の提案：LH15 と血中 T1/2

中嶋 憲一	絹谷 啓子	黄 義孝
道岸 隆敏	利波 紀久	(金沢大・核)
水谷 義晴		(徳島大・放)

^{99m}Tc -GSA の planar 動態検査において従来よりレセプター (LHL15) とクリアランス指標 (HH15) が用いられてきたが、これらを再検討した。特に、LHL15 は心臓の ROI の影響を受けるため再現性が不良で、また軽度の異常を分離できなかった。そこで、肝と心臓の関心領域を面積で補正することにより (nLHL15), 機能障害との直線関係が得られた。また LH15 は、機能障害とよく相関した。さらに HH15 に変えて指数関数近似による T1/2 を用いると分離が良好になった。臨床病期 0, I, II, III の平均値はそれぞれ LH15 で 5.5, 4.0, 2.3, 1.8, T1/2 は 15, 20, 30, 39 分であり、病期をよく分離した。

15. 原発性マクログロブリン血症の一例

渡辺 直人	清水 正司	富澤 岳人
亀田 圭介	金澤 責	豊嶋心一郎
森尻 実	野口 京	蔭山 昌成
瀬戸 光		(富山医薬大・放)
江幡 和美	渡辺 明治	(同・内)

症例は 61 歳男性で、主訴は顔面浮腫、四肢冷感であった。M 蛋白血症のため当院内科に入院した。身体所見は両側頸部、腋窩、鼠径部リンパ節腫脹を認めた。検査成績は血中 IgM 高値、赤血球連銭形成、クリオグロブリン血症および尿中 B-J 蛋白を認め、原発性マクログロブリン血症と診断された。入院時 CT では両側頸部、腋窩、骨盤内、鼠径部リンパ節腫脹を認めた。Tl scintigraphy では、両側頸部、腋窩、骨盤内、鼠径部に腫瘍集積を認めた。今回われわれは Tl scintigraphy を用いて、原発性マクログロブリン血症の腫瘍進展の範囲の評価が可能であった。